CASE STUDY

NTTテクノクロス

おたる地域包括ビジョン協議会（ICT 実行委員会）

在宅療養をチームの力で支える「おたるワンチーム」

ひかりワンチームSP

内科・循環器内科・訪問診療・強化型在宅療養支援診療所　高村内科医院

高齢化の進む小樽で地域包括ケアを支える「おたるワンチーム」

北海道小樽市は人口約 11 万人、高齢化率は 40%超であり今後更に高齢化が進展すると予想されている。そのような中、多職種チームが一体となって患者（利用者）をケアする取組みである「おたるワンチーム」が、小樽市の「在宅医療・介護連携 ICT 活用事業」を活用し 2017 年より活動をスタート、今では 171 事業所が参画し取組みを拡大している。

「おたるワンチーム」では NTT テクノクロスの「ひかりワンチーム SP（以下 OSP）」を活用し多職種が電子連絡帳により効率的に情報共有できる環境を構築している。①ワンチーム方針、②多職種連絡帳、③家族連絡帳、④個別メッセージ、⑤バイタル情報共有等の機能によってチームとしてのケア方針を共有し、日々の情報共有によって患者の状態変化に素早く対応することが可能だ。

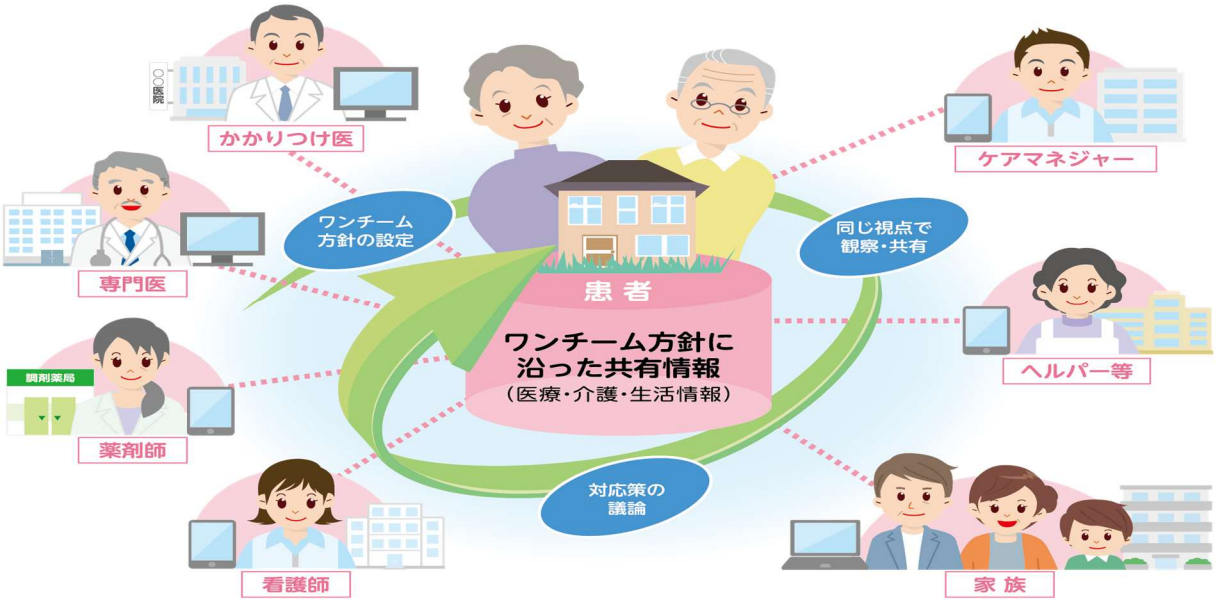
その具体的な取組みを、中心となって推進してきた方々よりご紹介いただく。

多職種チームの情報連携によりその人らしい在宅療養生活を実現

おたる地域包括ビジョン協議会 ICT 実行委員長・高村科医院 院長 高村一郎先生

高村内科医院院長の高村一郎医師は、おたる地域包括ビジョン協議会 ICT 実行委員長として「おたるワンチーム」を立上げ・推進し、自院でも多職種と連携して数多くの在宅療養患者を診てきた。「患者と正面から向き合うことがポリシー」と語る高村医師は、終末期の患者の在宅療養生活を多職種で支えるために OSP を活用する意義は大きいと話す。心不全と腎不全を合併し重篤な状態だった事例では、延命治療について話し合った結果を多職種で共有し、様々な対策を取ると共に食事など日々の楽しみを最大限尊重しケアを続けた。体調が悪化し透析ができなくなってからもこうした取組みにより 2 か月延命し、最後まで自分らしく過ごして貰うことができた。また、遠方の家族が認知症患者のケアチームに参加した事例では、鍵の紛失など生活上の問題にも素早い対応が可能となり非常に助かった。このように OSP を活用した多職種の協働により数多くの貴重な事例を経験してきた。

OSP によって医師から処方やその使用方法、生活上の注意点などが各職種にすぐに伝わり対応することができる。薬局との情報連携も非常に有用であり、疑義照会や患者の状態変化に合わせた薬の準備、服薬相談などがスムーズにできるメリットは大きい。患者家族も OSP ですぐに相談できる安心感に加え、チームの一員としてケ



アに参加することは大きな意味がある。

高齢化が進む日本では、人生の最終段階における医療・ケアの方針について患者・家族と多職種チームが繰り返し話しあって意思決定を支援するアドバンス・ケア・プランニング（以下 ACP）の重要性が増しているが、髙村医師は毎日の診療そのものが ACP であると話す。「日々の診療においては患者・家族に治療の選択肢を示し、何らかの判断をしていくことになる。その積み重ねが ACP だ。OSP に記録として残すことで、患者・家族も確認できる ACP の意思決定ツールとして機能している。」

患者・家族も繋がることで見守られている安心感を醸成

ケア・オフィス優　所長（看護師）
二丹田 早稲子さん

ケア・オフィス優所長で看護師の二丹田早稲子さんは、髙村医師の紹介で OSP を利用し始めた。「終末期の患者が大病院から退院した時は見放されたような気持ちになることもあるが、多職種に患者・家族も加わり OSP で情報共有することで、チームに見守られていることに気付き、安心して在宅療養できるようになる。」と語る。

ICT により日々の情報共有が出来ていることは各職種にも安心感をもたらす。終末期では状況に合わせて医師の指示が頻繁に変わるが、OSP の連絡帳に指示が登録されるとメールが届き、素早く効率的に対応できる。主治医より「多職種チームの情報登録のおかげで安心して学会に参加出来た。」と労われたこともあった。バイタル情報の共有機能も有用であり、体重変化を見ながら栄養補給を行うなどケアに活用している。腹水が溜まってきたら腹囲の項目を追加するなど患者の状態に合わせた設定変更も可能だ。今ではチームメンバーも有用性を実感し、進んで入力してくれるようになった。こうして自宅で看取れる事例が増えていることは励みになっていると語る。

質の高い情報共有により心の通ったケアを実現

ケアプランセンターきりん
管理者　ケアマネージャー　大塚睦美さん

ケアプランセンターきりんの管理者でケアマネージャーの大塚睦美さんは「おたるワンチーム」の命名者であり初期からの活動メンバーである。

「以前は各職種に同じ内容を電話で伝え、FAX も併用していたが、導入後は一回の入力で全員に正確な伝達ができるようになり効率化できた。また OSP はケア目標を設定・共有できるが、これは電話ではなかなか伝えきれていなかった。」と語る。

OSP への入力の手間はあるが、様々なメリットがある。例えば患者の家族が遠隔地に住んでいる場合には日々の状況把握や意思疎通が良くなることで、ケア方針について良い判断が出来る。終末期では提供サービスも早いスピードで変わっていくが、福祉用具についてもチームに取扱店が入っていることで、素早い対応ができている。バイタル情報の推移からも様々な気づきがありケアプラン作成に役立っている。

「多職種の書込みを患者・家族が見ることでチームに見守られている実感や、繋がっている安心感を強く感じてもらえる。看取り後に、家族がねぎらいや感謝の言葉を多職種連絡帳に書き込んでくれることもあり、心を通わせケアを提供できることに充実感を感じている。」

より多くの多職種が参加しチームケアのノウハウを共有へ

今後について、髙村医師は歯科医師の参画も重要だと指摘する。「実際に口腔ケアによって終末期の患者が改善した事例もある。嚥下の改善で食べられるようになると元気になる。患者・家族に歯科の往診が可能であることを知って貰うことも重要だ。」

また、「『おたるワンチーム』にはチームケアのノウハウが詰まっており、多くの職種にこの取組みを知って貰いたい。これから在宅医療や往診を始める医師にとっては教育ツールとなり、新しく参加する多職種はまず OSP で今までの経過を見ることが学びにもなると考えている。地道にその良さを知って貰い、広げていきたい。」と語った。

■お問い合わせ

ＮＴＴテクノクロス株式会社
IOWN デジタルツインプラットフォーム事業部
メディカルビジネス推進部門
〒220-0012
横浜市西区みなとみらい 4-4-5　横浜アイマークプレイス
e-mail：x-dp-oneteamsp-info-ml@ntt-tx.co.jp
URL:https://www.ntt-tx.co.jp/